



400年の歴史が息づく、直方の至宝「高取焼」

大名茶陶として全国的に有名な高取焼は、慶長5年(1600年)に関ヶ原の戦いの功により筑前一国の大大名となった黒田長政が、朝鮮出兵の際に連れ帰った陶工の八山(はちざん、のちの高取八蔵)に窯を開かせたものです。同じ頃に西国の大名たちが朝鮮陶工による窯を開いています。薩摩藩の「薩摩焼」、長州藩の「萩焼」、小倉藩の「上野焼」、佐賀藩の「伊万里焼」等が該当します。

高取焼の最初の窯

鷹取山(標高630メートル)の南麓において、黒田長政が八山に命じ、最初の窯を開かせます。これが「永満寺宅間窯」で、その窯跡は昭和57年に発掘調査が行われ、現在、直方市の文化財に指定されています。この窯は全長16.6メートル、傾斜角は11度とゆるく割竹式構造の登り窯で、構造・製品ともに朝鮮半島の李朝陶器の影響が強くみられます。



▲永満寺宅間窯跡(永満寺、直方市指定史跡)

うちがそ 内ヶ磯窯跡

内ヶ磯窯(頓野、右ページ写真)は『筑前国続風土記』、『高取歴代記録』によると、慶長19年(1614年)に開窯しています。寛永元年(1624年)、高取八蔵は嘉麻郡山田村(現在の嘉麻市)に移りましたが、残った陶工たちによって寛永7年頃まで内ヶ磯窯での生産が続いたという説もあります。全長46.5mと当時では有数の規模を誇る階段状連房式の登り窯で、宅間窯跡に比べて格段に規模が大きくなり、美濃、唐津、備前等の影響を受けた多彩な製品を生み出しました。また、福岡藩が将軍家やその重臣等に献上した茶器も焼かれました。藩がこの地での陶器生産に大きく注力していたことがうかがえます。以後、高取焼の窯は山田から白旗山(飯塚市)、小石原村(東峰村)と転々となりました。

内ヶ磯窯跡は福智山ダムの完成後、現地を見るのが不可能になったため文化財の指定は受けていませんが、高取焼の歴史の中でも重要な窯跡です。

茶の湯が育てた美

やがて高取焼は茶人のこぼりえんしゅう小堀遠州の美意識にも影響を受けます。遠州が好んだのは「きれいさび」と呼ばれる、上品さと静けさをあわせ持つ美しさ。高取焼はその感性を取り入れ、洗練された姿へと磨かれていきました。



武士の時代に育まれたこの美意識は、今でも器の中に静かに息づいています。

郷土資料室で出土品を展示中

column

中央公民館の郷土資料室では、「宅間窯跡」「内ヶ磯窯跡」からの出土品を展示しています。当時の職人の技を間近で見ることができます。私たちの足元に眠っていた、郷土が誇る歴史の息吹をぜひ感じてください。

【問い合わせ】文化・スポーツ推進課 社会教育係 ☎25-2326

高取焼

400年の
静寂をひらく

戦国の世から現代へ。

直方の地で生まれた高取焼は、福岡藩の庇護のもとで育ち、時代の荒波を越えながら受け継がれてきました。茶の湯の広がりとともに洗練され、御用窯として名を高めた高取焼。廃藩置県という大きな転機を経てもなお、窯の火は消えることなく、今日へと続いています。400年の歴史をひもとき、その魅力に迫ります。